



理 念

働く人と地域のために

患者中心の最善の医療を実施します

Contents

新年の挨拶	
佐藤院長	1
石丸副院長	1
山口看護部長	2
MRI装置を更新しました	2
地域包括ケア提供体制における 病院内の地域連携の集約化が目指すもの	3
連携室の集約化について	3

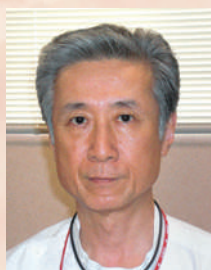


新年のご挨拶

病院長 佐藤 譲

日頃は当院の診療運営面で多大なご支援、ご配慮を頂き厚く御礼申し上げます。当院は労災病院として政策医療である勤労者医療を実践する一方、川崎市南部2次医療圏の地域医療支援病院、神奈川県がん診療連携指定病院、災害拠点病院など地域医療の中核病院としての役割を果たしてまいりました。

今後、団塊の世代が75歳以上となる2025年に向けて、我が国の医療情勢は大きく変化していくと考えられます。病院には「病棟機能」の役割を明確化することが求められ、他方クリニックの先生方には「主治医機能」を果たすことが強く求められると予想されます。また在宅医療に関して病院の勤務医とクリニックの先生方との間で更なる強い連携が必要とされると考えられます。当院では職員が一丸となり、安心安全な医療を提供し、ランドマーク病院として地域の方々から信頼される病院を目指して病院づくりを行って参りたいと存じます。皆様方の一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。



新年のご挨拶

副院長 石丸 正寛

新年あけましておめでとうございます。当院は昨年4月に院長、副院長、看護部長、事務局長、事務局次長と病院幹部が交代し、新しい体制での病院運営がスタートしました。私も新人副院長としてわからないことだらけの中で参加してきました。当院は職員1000人を超える大所帯で、その運営の難しさに頭を悩ます毎日でした。様々な問題が浮き彫りとなり、一つ一つ解決していくために時には迅速な対応が、また時には地道な努力の積み重ねが必要とされました。

この経験を得て今年はより積極的に当院のあるべき姿を考えいろいろな方策を実行すべきと考えています。そのためには政府の打ち出す医療政策に沿った方針で臨まなくてはならないと思いますし、何より職員が一丸となって同じ目標に進んで行くという共通認識が大事だと思われれます。

当院の基本理念である「働く人と地域のために、患者中心の最善の医療を実施します」を掲げて、地域の住民の方々からまた開業の先生方から信頼され、選ばれる病院として発展していくように皆様方のお力を借りて頑張っていきたいと思っています。



新年のご挨拶

看護部長 山口 千恵美

新年あけましておめでとうございます。当院は、地域医療支援病院、神奈川県がん診療連携指定病院、災害拠点病院としての役割を果たし、皆様から信頼される「地域のランドマーク病院」を目指しています。複数の職種が専門性を発揮しながら協働していく「患者中心のチーム医療」を推進しています。

このことを踏まえて看護部では、安全で質の高い看護が実践でき、皆様に満足していただけるように、人材育成や、看護職の役割が発揮できる活き活きとした職場づくりを目指しています。専門職として、主体的に『行動』し、看護を『創造する』力を持ち、患者さん及び自分の能力をも『導き出す』成人学習者として努力しています。適切な看護が提供できるように、11分野17名の認定看護師や糖尿病療養指導士等のリソースナースが組織横断的に活動していると共に、最も大切だと言われている日頃からの気配り、声かけ、話をきく等に心がけています。今後も、皆様の期待に応えられる看護が提供できるように努めていきたいと思っています。ご支援よろしくお願い申し上げます。

MRI装置を更新しました

当院におきましては、より質の高い医療の提供を目指し、平成25年11月よりMRI装置の更新作業を行って参りました。この間、近隣医療機関のみなさまには、大変なご不便をお掛けしましたことを深くお詫び申し上げます。

今般更新作業が完了し、1月21日より世界最新鋭の(独)シーメンス社製MRI装置・Skyra（スカイラ）が稼動いたしました。

この装置の特長は、下記のとおりです。

1. 高磁場強度3 T(テスラ)により高精細な画像提供ができ、微小病変が見やすくなります。
2. 開口部が71cmとなり、快適に検査が行えます。
3. 多彩なアプリケーション・ソフトにより、ASL（非造影パーフュージョン）や血管撮影が行えます。
4. 流体力学応用により、動脈瘤内の血流情報のシミュレーションが行えます。



検査室も、明るく静かな環境となりました。興味のある方は何時でも見学にいらしてください。

地域包括ケア提供体制における 病院内の地域連携の集約化を目指すもの

地域医療連携室長 岡崎 裕司

高齢化社会の最注目点は、団塊世代が後期高齢期に入る2025年には、75歳以上の高齢者人口が都市群に急増し、特に85歳以上の人口伸び率が高いことです。

また、85歳以上では介護保険サービスを約半数が利用し、その多くは医療サービスを受けており、独居高齢者の急増は、単なる医療・介護サービスの整備に留まらず保険サービス以外の生活支援サービスと生活の基礎となる住宅の確保と一体化したケアが喫緊の問題となっています。

一方、24時間365日「生活を支える」サービス提供体制の確保が困難な理由は、多職種協働の困難さ、所属組織の異なる中での意思統一と迅速な決定があり、厚労省は多職種協働の推進に向け地域ケアの会議の普及・促進を図っています

「連携」とは、お互いの強みと弱みを理解し合ったうえで、お互いの機能を補完し合うために行うものです。連携自体が目的ではなく、「要介護高齢者の生活機能維持・向上を図る」という共通目標を達成すべく連携を行うことにあります。その意味で、今回は地域包括ケア提供体制の礎として院内の連携強化＝顔の見える集約化を図ったものです。

今後ともよろしくご指導、ご鞭撻のほどお願い申し上げます。

連携室の集約化について

看護相談・MSW 一同

平素より、当院の地域医療連携に対して、格別のご理解とご協力を賜り、誠にありがとうございます。

昨年秋より、「看護外来」、「医療相談室」は、「地域医療連携室」のある1階へ移転し、各部署連携強化を目的として、「総合医療相談センター」として発足いたしました。

当院は、地域の中核病院として急性期医療を提供しており、急性期の治療が終了した時点で原則として退院の運びとなります。これまでも、それぞれの専門性を生かし、患者様の入院院及び退院後の生活に向けて支援を行ってまいりました。今後とも、多職種と密に連携を図り、サポート体制を強化して参ります。今後とも何卒、関東労災病院「総合医療相談センター」をよろしくお願い致します。